事例52

学力の向上をめざし、生き生きと学ぶ生徒の育成

七尾市立香島中学校

1　事例の概要

(1)　研究目標

学校生活の基本は授業であり、授業がわかる、参加できることが生徒の自信を育てる大きな柱である。そこで、わかる授業、全員が参加できる授業に向けて授業での基礎・基本の徹底をはかり、生徒の自信を育てる。そのため、生徒の実態を正しく把握し、生徒自身が学力の向上を実感できるような評価方法の改善を図る。

(2)　研究組織

昨年度の生活実態調査からも、本校生徒の特徴として、学習面では「他人に依存する傾向があり、学習に対する心構えや取り組みがやや消極的である。」、生活面では「基本的生活習慣が確立していない生徒の割合が多い。」ということがあげられる。このような生徒の実態から、研究主題にある望ましい生徒像へ導くために、下記の２つの部会を組織した。

（学習面）授業研究部会・・・評価のあり方、授業改善の方法の研究
（生活面）生徒理解部会・・・生徒の実態把握、学習環境の改善

Ａ－１　研究全体構造図

2　実践内容

(1)　全体の取り組み

① 評価規準表＆年間指導計画表の書式の統一
② 学習指導案の書式の統一
③ 授業研究会の実施

(2)　授業研究部会の取り組み

① ２つの評価カードを活用した授業実践

ア Ｔカード・・・教師記入用評価カード
・評価規準に従って、その授業での評価規準を一人一人の生徒が達成しているかどうかチェックする。・・・形成的評価
・「単元」や「学習のまとまり」ごとにまとめて、毎時間の記録から一覧表を作成し、定期テストの状況などを加味しながら評定を行う。・・・総括的評価

イ Ｓカード・・・生徒記入用評価カード
・授業の最後に、生徒が１時間の授業を振り返り、「今日の目標」を考慮しながら「わかったこと　わからなかったこと」を記入する。・・・自己評価
・「教師が楽しい授業、わかる授業をしているか」ということを生徒が評価するカードと捉え、授業改善に利用する。

ウ ２つのカードを生かした授業改善
・前時のＳカード・Ｔカードの評価結果より、「評価規準」や「今日の目標」に達している生徒が多い場合と、少ない場合の導入に変化をつける。…「導入１」「導入２」
・授業の中ほどに、「Ｔカード」によって評価を行い、「評価規準に達している生徒への支援」と「評価規準に達していない生徒への支援」を用意する。

② 基礎学力調査の分析

ア 基本方針・・・生徒の基礎学力を多面的に捉える。

（例）　「単元別集計」、「学年別集計」、「分野別集計」、「観点別集計」
「解答方法別集計」、「誤答の傾向調査」など

イ 第２回基礎学力調査
夏休み中に同じ問題で２回目の調査を行い、生徒の基礎学力の変容を捉える。また、その変容から、指導方法・単元構成などを見直す材料とする。

ウ 分析結果をまとめ、その分析結果より「本校生徒につけたい力」を共通理解し、すべての教科の授業で工夫し実践する。

(3)　生徒理解部会の取り組み

① 家庭学習調査
毎日の家庭学習時間を調査し、パソコンにデータを入力する。１週間ごとの平均時間、分布状況等を「学年だより」などで、生徒や保護者に知らせる。

② 生活実態調査
「起床・就寝時間」「学習時間」「食事の習慣」「歯磨きの習慣」などの生徒の生活を調査し、昨年度の調査結果と比較しながら、生活習慣の改善状況などを把握する。

③ あいさつ運動・朝読書
学校生活の始まりが、さわやかで落ち着いたものとなるように、毎朝、生徒会を中心に校門前であいさつ運動を行う。（７：４５～８：１０）
また、教室に入ってからは朝礼前に１０分間の朝読書を行う。

Ｂ－１　Ｓカード	Ｂ－２　指導案	Ｂ－３　家庭学習調査結果

３　成果と課題

(1)　成果

① 授業研究部会の取り組み
・教師が、目標達成のために「授業の流れ」を考えることが多くなった。「今日の目標」を設定し、その授業の評価規準を確かめた上で、その目標をすべての生徒が達成できるような授業をめざすようになった。
・教師が、生徒の意識や理解度をより深く把握できるようになった。
・生徒が授業に一段と集中するようになった。「今日の目標」を授業の最初に確認することで、「何をすればいいのか。」を理解し、前向きに学習できるようになった。
・生徒の基礎学力を多面的に捉え、２回目の調査でその後の理解の深まりを知ることにより、授業改善のポイントが明確になった。

② 生徒理解部会の取り組み
・家庭学習時間が着実に伸びてきた。
・生活実態調査を行ったすべての項目で、昨年度より改善されてきた。
・生徒の生活状況や家庭学習時間を正確に把握することにより、教育相談などいろいろな場面で、より効果的なアドバイスができるようになった。
・授業をはじめ、いろいろな教育活動で積極性が高まり、学校全体に落ち着きが見られるようになった。

(2)　課題

２年間の研究によって、取り組みの方向性や基本的な実践内容は整備されてきたが、今後はそれぞれの取り組みがより効果的になるような、より具体的な手立ての充実を考えていかなければならない。また、基礎学力調査の分析結果などから、本校生徒の学力向上のためには「関心・意欲・態度」の向上に向けて重点的に取り組む必要がある。生徒の思考の流れに添った『問題解決型』の授業展開や生徒の発言や活動の多い授業を目指していかなければならない。